

地域の特色を生かし、学習意欲を高める

農業教育の在り方について

北海道帯広農業高等学校 校長 米田敏也

1 はじめに

本校は大正九年に帯広町外一二ヶ村組合立十勝農業学校として創立し、「勝農魂」を根底に「礼儀」・「協同」・「勤労」の精神を柱とした実践的な農業教育を行っています。卒業生の多くは地域農業者のリーダーとして活躍し、政財界や教育界、スポーツ界にも多くの有能な人材を輩出しています。平成一五年四月に農業新時代に対応すべく、全日制課程で学科改編が行われ、現在の五学科五間口の体制となり、各学科を大きく二つの領域に分け、フード系学科として（農業科学科、酪農科学科、食品科学科）、環境系学科として（農業土木工学科、森林科学科）を置いていきます。自営者養成に関わる寄宿舎教育については、フード系学科に入学した生徒を対

象に行っています。義務入寮期間は、農業科学科、酪農科学科の生徒は通年、食品科学科の生徒は二期に分け、四カ月間です。

寮においては、規律ある共同生活を通じて、豊かな人間性を養成すると共に、「自立」・「協同」・「友愛」の精神を養い農業後継者としての確固たる信念と、たくましい実践力を身に付けた農業人の育成をはかつて



います。

本校ではクラブ活動が盛んで、部活動の加入率も高く、多くの生徒が放課後、積極的に活動を行っている。特に近年では陸上部、柔道部、スケート部の活躍がめざましく、インターハイで優勝するなど輝かしい結果を残し、文武両道を実践しています。

2 後継者教育に関する取り組み

本校、農業科学科、酪農科学科では、年度による違いはあるものの、進学後に後継する者も含め最終的に5割前後の農業後継率となっています。後継者育成の取り組みには、農業経営者育成における生活および時間外実習指導、授業における基礎学力指導、農業クラブ活動におけるプロジェクト学習指導、農業系の大学等への進学指導、卒業後即就農者に対する地域農業および農業関連施設の見学、モラルや理念に関する指導などが行われています。専門知識だけでなく、生命尊重、生活態度や自己規律、情熱や理念の教育にも力を入れています。これらの土台を作ることが農業高校の役割であり、経営者にとって必要であると考えています。技術は日進月歩で十年後には古びてしまいます。経営者には、常に時代の先を読み、食料生産という仕事に誇りと、高い倫理観を持つて取り組むことが必要です。そのためには、情熱と理念をしつ

かりと持ち、どのような厳しい状況下でも前向きに取り組んでいける人間でなければなりません。

授業では、農業専門機関や地域先進農家や酪農家との連携を常に意識し、農家で実施されるより早く、新技術を導入し、農家でやれないような挑戦的な実験も多く取り入れることで、試行錯誤する力やチャレンジ精神を培っていくことも重要と考えます。また、その時々々の課題に対応して、酪農科学科では、バンカーサイロや石窯を自作したり、土木科から測量機器を借りて暗渠工事をしたり、木を切つて森を整え、牛を放したり、というような様々な日常の体験も柔軟に取り入れ、積極性やチャレンジ精神を育てています。また、酪農科学科では夏季休業を活用しての自主的な研修として、希望者に海外や管内における農家委託実習も導入し、社会性や産業の視野を広め、グローバルな視点での物の考え方を身につけた自立した人材の育成教育にも取り組んでいます。

3 後継者育成に向けた本校の取り組み

【平成二〇年】

・北海道開発局開発建設部帯広農業事務所「教育支援パートナーシップ」協定
暗渠排水施工工事、リモートセンシング技術の講習などを
実施

- ・帯広市エコフイード研究会加入
 - ・十勝ナチュラルチーズ連絡協議会加入
 - ・X精液を用いた採卵実施（GH）
 - ・「サイエンスパートナーシップズ（SPP事業）」（文部科学省）
農業科学科・酪農科学科、農業土木工学科、森林科学科の
四学科が指定
 - ・遺伝子組み換え作物を利用した遺伝子解析実験開始（帯広畜産大学）
 - ・洞爺湖サミットに関わる「専門高校生による環境サミット」（外務省）
 - ・北海道有機認証協会の指導のもと、学校農場に有機圃場二六アールを設置、有機JASの認証を受ける。
- 【平成二十一年】**
- ・専門高校パワーアッププロジェクト（北海道教育委員会）（一～二三年）
「集約放牧酪農の研究」
 - ・転換期間中有機農産物として販売開始
- 【平成二十二年】**
- ・「サイエンスパートナーシップズ（SPP事業）」（文部科学省）
 - ・冬期間無暖房によるホウレンソウ栽培（北海道大学）
- 【平成二十三年】**
- ・有機JAS農産物を本格的に販売開始
 - ・酪農教育ファームの認証取得

- ・放牧牛乳を近隣のチーズ工房に出荷開始
 - ・乳牛の体外授精技術導入
- 【平成二十四年】**
- ・十勝管内九工房でつくる共通チーズ「とかちふれっしゅ」の製造販売開始

4 地域の特色を生かした農業教育

本校で行われている地域と連携した取り組みを紹介します。

①「有機JAS認証に向けた取り組み」

農業科学科

本校では地域の特色を活かした農産物の生産や加工を行い、アンテナショップや地域イベントに出品しているため、品質はもちろん環境に配慮した安全・安心な農産物について、生徒の理解を深めて行かなくてはなりません。

その具体的な取組として、有機JAS認証栽培を教育の一環として位置づけ、環



境に配慮したスペシャリスト（農業者）の育成を目指した活動を行っています。

北海道有機認証協会の指導のもと、学校農場に有機圃場二六アールを区画割して、ジャガイモ、カボチャ、ゴボウ、玉葱などを栽培し、生徒の日頃の授業やプロジェクト研究活動に利用しています。

平成二〇年に有機JASの実地検査を受け、有機JASの認証を取得しました。現在、有機生産物にはJAS有機のシールを貼り、消費者への普及に努めています。

②「放牧牛乳を使ったナチュラルチーズの商品化を目指した取り組み」

酪農科学科

本道の酪農経営を持続的に発展させるため、良質な自給飼料づくりと乳製品（ナチュラルチーズ）にかかわる加工技術の習得に取り組んでいます。このことは、良質で安全・安心な牛乳の生産とナチュラルチーズの加工を行うため、農薬・化学肥料を削減し、堆肥を中心とした粗飼料づくり



をはじめ、高タンパクな豆科（アルファアルファ）牧草の持続性を考慮した栽培やデントコーンの雌穂のみを使用したサイレージづくりを行い、これらの自給飼料を餌として生産された牛乳からナチュラルチーズ（ラクレット）の製造の過程で実践的な多く、生産者としての資質を高めることとなります。研究に当たりチーズ工房を営む共働学舎新得農場の宮嶋先生をはじめ、多くの地域専門機関との連携を図っています。

また、平成二一年度から集約的放牧酪農に取り組み、今年度からは放牧牛乳を使用し、十勝管内の九工房でつくる共通チーズ「とかちふれっしゅ」の製造を開始しています。

食品科学科

十勝産小麦の消費拡大を目指し活動を行っています。地元企業の満寿屋パンと連携し、地元の農産物を活用した新商品の開発やキヤラクターパンの製造・販売を行っています。また、小麦の見本農園を店舗のそばに設け、種まきから収穫までを担当し、地域の方々に小麦

を知っていただく活動を行っています。また、十勝管内市町村の代表的な農畜産物を利用したご当地ピザの開発を手掛け、十勝産オリジナルピザ「十勝ピザコレクション」の商品化を行い、地域から高い評価を得ています。

5 後継者教育の課題と展望

少子高齢化社会といわれる現代、専業農家の担い手数が減少する中で、普通科高校ではなく農業高校に入学させたいと思える魅力ある学校をいかに築いていくことが出来るかということが課題となります。そのためには、農業は自然科学であり、全ての科学の基本であり、食農教育は人間が生きる上での基本であることを認識し、農業の多面的機能や農業の魅力を発信する活動や地域の農業者や企業、専門研究機関とも連携し、一方では先見的な取り組みや地域の模範となる活動にも積極的に取り組み、地域の期待を反映できる柔軟な農業高校を目指します。

特に、地方の農業高校の入学者数が減少で、後継者率の低下や小規模化が進む中で、自営者教育寮を持つ本校での役割は、後継者教育の要として重要になってきます。今後は、この寮教育を有効に運営し、全道の後継者を集め、同世代の同じ目標を持つ後継者が切磋琢磨する教育環境を構築することが重要になってくると考えています。

6 まんが「銀の匙」について

本校の卒業生である荒川弘さんの執筆で本校の寮教育を題材にしたマンガ「銀の匙」が話題を集めています。本校 酪農科の出身であり、酪農を数年間、自営されていた経験から農業高校を舞台とした酪農青春コメディを発表し、昨年度、まんが大賞を受賞するなど大きな反響を呼んでいます。発行元の小学館からは内容に関する相談などが頻繁にあり、農業や農業高校のPRという面でも、たいへん大きな反響があります。この作品には、本校のOBらしく作者の生命や食料に関する哲学や人間愛が、端々に表現されており、生産者も消費者も含めた全ての人間がこれからのどのような価値観を持ち、どのような社会を形成していくべきか示唆を与えているような内容です。

本校としても、現代の偏った経済至上主義の価値観やT P P 交渉参加問題など現代社会の農業を取



り巻く環境の変化に対応して、多くの方々が考える機会となる意味でも応援しています。

7 農業の基礎となる幅広い学習ができた！ (卒業者からの声)

平成二〇年度 農業科学科卒業

横山 貴弘 (帯広畜産大学草地区別科)

私が帯広農業高校に入学した理由は、出身が帯広で実家から通学が可能なこと、そして土壌性質や気象条件などが同じで、実家の農業と平行して学習が出来るというのも魅力でした。

現在、地元で農業経営をしていく中で基礎となるものは、農業高校で学び、身に付けてきた内容です。高校では農作物の栽培知識はもちろん、栽培技術や農業機械の操作、更には、パソコンを用いた学習、簿記など農業に関して幅広く学習をすることが出来ました。充実した大学生活が送れ、今、現在があるのは、高校時代に学習はもちろん寮生活や部活動など、様々な面で培ってきた成果だと思っています。

